本荘ふるさと会

本荘ふるさと会会報
第 5 号
平成4年10月1日
編集・発行
本荘ふるさと会会報
編集委員会
事務局
◇秋田県本荘市出戸町字尾崎17
本荘市産業経済部地域振興課
☎0184（24）4181
◇東京都大田区北馬込
荒川医院内
題字　後藤竹清

ご紹介ください 会員募集中!!

会の充実と発展・拡大を図るため新会員を募集しています。親族、知人等可能な範囲において、本荘市出身首都圏在住者をご紹介ください。

お問い合せ
本荘市産業経済部地域振興課内
本荘ふるさと会 事務局
☎ 0184−24−4181

ふるさと秋田定住促進「Aターン大作戦」を展開!

～あきたへ、あなたも、あしたから～

これは、前年度と比べて一三・六%増で、人数で百三十三人多くなっており、「Aターン大作戦」の効果が出ています。

本荘市においても、ハローワークで百七十七人がAターン求職をしており、うち六十五人が就職しています。

本市では、今後も県と連携をとりながら、若者の地元定着を促進するとともに、Aターン就職の受け入れ体制強化を図っていきます。

Aターン

Aターンとは、Uターン・Iターン・Jターン等すべての県内就職を促進する意味で、ALL（オール）とAKITA（アキタ）に掛けた造語です。

「Aターン大作戦」スタート!

秋田県が抱える最大の課題と言える人口減少対策として、若者の県内定着を促進するため、県内各市町村と連携をとりながら「Aターン大作戦」を大規模に展開しています。

県では、これまでも若年労働者の確保に対応するため、雇用環境の整備、新規学卒者の県内就職促進、Uターン技術者の確保等に取り組んできましたが、平成三年度に、観光・住宅環境等を含め、魅力ある秋田をPRしていく「ふるさと秋田定住作戦」が掲げられ、これまでの諸施策をさらに充実強化させた内容となっています。

「Aターン大作戦」では、従来のUターンのみならず、本県とゆかりのある人や首都圏脱出希望者のIターン等にも、広く秋田県への就職を呼びかけています。

○「Aターンプラザ秋田」東京有楽町にオープン

首都圏のAターン情報発信拠点として、県内の就職情報や住宅等の生活関連情報の提供、就職相談等を行っています。（JR有楽町駅前東京交通会館11F　フリーダイヤル0120−122255）

帰省時に合せた本荘でのふるさと就職相談会

○ふるさと就職相談会の開催

県内企業が東京に出向いて、Aターン希望者と就職の面接相談を行うほか、盆などの帰省時期にも、県内各地において就職相談会を開催しています。

○Aターン・定住促進マイホーム資金

Aターン者や若年者に対し、住宅金融公庫の上乗せ分として、五百万円までの低利融資を行います。

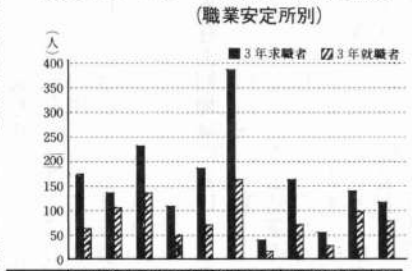
○Aターン起業家支援事業

自分で企業を起こしたいAターン者で、先端技術産業等の業種を対象に、起業化に必要な資金の融資、設備の貸与等の支援をします。

以上の施策の他にも、Aターン登録制度、首都圏の県事務所や地方銀行にパソコンを設置しての県内情報の提供、東京の各区にAターン推進員を置くなど、積極的に秋田県への定住をPRしています。

平成三年度のAターン実績では、「Aターン登録者」から二百二十一人が就職、また秋田へ戻りハローワーク（職業安定所）で求職した人から八百八十八人が就職、計千百九人がAターン就職しました。

平成3年度　Aターン求職者・就職者状況
（職業安定所別）



	本荘	鹿角	大館	鷹巣	能代	秋田	男鹿	大館	角館	横手	湯沢
3年求職者	177	134	236	115	191	390	36	167	57	141	118
3年就職者	65	105	134	51	68	166	17	69	31	101	81

（地区）

「きてたんせ秋田号」発車!

この夏、七月中旬から半月間にわたり、首都圏JR線に各一編成の車内広告すべてが《秋田》という「きてたんせ秋田号」が登場、期間中およそ二百五十万人の電車利用客に秋田をPRしました。

これは、Aターン推進と観光客誘致をねらいに「まるごと秋田キャンペーン」の目玉として、秋田県が企画したものです。

電車広告の他にも、新宿駅前では、「まるごと秋田クイズ」や「あきたこまち」のプレゼントを行うなど、東京に〝秋田Aターン〟旋風を巻き起しました。

問い合せ
本荘市産業経済部商工課
☎0184（24）3321（代）

JR線に秋田の車内広告登場

会員だより

本号から会員間の情報交換の場として新設しました。出身校同窓会、同期会、出身地区の親睦会のお知らせや催し物のご案内などにご利用ください。（短信も受付けます）

楽しい「新山会」

杉並区　武田　夏男（後町出身）

春と秋、年二回旅行を楽しむ会がある。本荘中学（現北中）の昭和二十八年卒業生の関東地区在住者の同窓会です。ふるさと本荘の新山サマにちなんで、名付けて「新山会」。スタートして十余年。登録メンバーは男女約八十名、出席者も毎回五十名を越え盛況です。会は数名の幹事が世話役を承り運営しております。春は鎌倉在住の鎌倉彫で活躍の会員の案内による鎌倉ハイキング（四年連続）と秋には関東各地への一泊旅行（今秋六回目）が年間行事として定着したようです。中には旦那さんや奥さんを伴って家庭サービスにつとめる者もおります。ふるさと本荘を懐しみ、青春時代の想い出話に花を咲かせ、近況を語り合い、旧交を温めております。この楽しい会の噂が各地の仲間に届き最近は地元本荘や関西地区からの参加者もあります。また会合の都度、卒業以来四十年振りの再会のシーンもあり、感動的で感涙にむせぶこともしばしばです。―昨秋は旅行の出発点東京駅前で起りました。―集合場所での目標にと会旗を作りました。青と緑の二色地に白抜きで新山会。日本海と本荘の空の青色、新山の松の緑、白は本荘人の清純潔白です。会合のフィナーレには当時を想い出し「春は桜に照るや鳥海……本荘ここに我等あり」と校歌を自家製のピアノのカラオケテープで唱和し再会を約束しております。今秋は十月二十四・二十五日那須・日光方面旅行です。大勢の仲間がまた集まります。

◇「新山会」秋の旅行案内
日時　10月24日(土)～25日(日)
　午前8時40分集合
場所　東京駅丸ノ内　南改札口
宿泊　南那須大金温泉グランドホテル
会費　3万円程度
見学　日光～中禅寺湖～霧降高原～袋田の滝～水戸偕楽園

問い合せ　武田夏男
☎03（3778）2861

新山会の会旗を囲んで

「東京村長」と呼ばれて

国分寺市　池田（鈴木）哲三（田町出身）

〝山に生まれた子供は永遠に心に山を持つ。まるで磁石のように山は心をとらえて離さない〟N・スコット・モマディ

太平洋戦争の始まった昭和十六年から十七年の激動の時代に私達は生まれ、戦後の貧しい生活を経験しながら五十代に入った現在、人生の半ばを過ぎ、精神的に若干のゆとりが持てる様になりました。しかし、公私共に多忙の中でふと心の安らぎを覚えるのは幼き時代過ごした故郷の思い出であり、友達と遊び学んだ小・中学校時代ではないかと思います。私達は本荘中学校昭和32年卒業で当時11クラスのマンモス学年でした。集団就職もあり、高校、大学へと進学するには経済的にも大変苦痛な時代でした。

新橋第一ホテルでの同期会

私達の会は東京近郊だけで、あらゆる分野で活躍している一〇〇名の同期生がおり、お互いに仲良く寄り添って自分を確め合う事は本当に良い事だと痛感する昨今です。自分を見失う様な大都会の中で…懐しいだけではなく最近は仕事や趣味の接点等、大きな輪は更に広がりつつ今後が楽しみな仲間です。

本荘の友人から「君は東京を狭くしているネ」とも云われ、更に「東京村長」とも呼ばれてしまう程です。有志によるミニ旅行は当然の事、新橋・銀座第一ホテル・東京女子会館・墨田川の屋形船貸切等、会を重ねるごとに幼き時代へと逆戻りをして行く郷愁を感じます。友達は〝心の財産〟と云われる様に私は今、本当に良き友人が多いことに感謝しております。

〝酔うほどに青春に戻る雪の夜〟
本荘にて

小いさなふるさと会「本荘鶴舞会」

川崎市　工藤　紘治（東町出身）

本荘鶴舞会とは、本荘町と南内越村との組合立本荘中学校を昭和二十九年に卒業し、関東地区に居住している同期会のことです。

昭和五十三年十二月に第一回の会合をもち、その時決めたことは、毎年十二月第一土曜日に開催することとし、幹事は順番制にすること位で、会則もなければ役員もなし、細かいことは一切ありません。

はたしてどれ位続くだろうか不安でしたが、年々盛大となり、なんと十五年も続いています。

毎年十二月第一土曜日であったものが、今年から六月の第一土曜日に変更しました。それは本荘ふるさと会が十一月下旬に開催されることから、期日が接近するため、本荘ふるさと会から押出されたかたちとなりました。

今年は期日を変更した最初の年でしたが、本荘や九州からも含め二十数名の参加があり、六月六日古都鎌倉で開催しました。寄贈品の由利正宗を飲みながら「ンダ・ンダ」を連発し、気がねなく本荘弁を話せるこの会は、ストレス解消の場でもあるわけです。

規模は小いさくても楽しさは大きい本荘鶴舞会を自慢に思うと共にふるさとに感謝しているものの一人です。

ふるさと本荘へのいざない

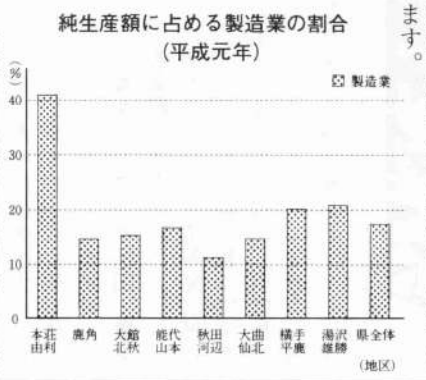
本荘由利地域の産業構造とハイテク技術産業の集積

本荘由利地域の産業構造

本荘由利地域の産業別就業人口構成の推移を見ると、第一次産業が、昭和五十五年25・8％、昭和六十年21・8％、平成二年16・8％と減少してきている反面、第二次、三次産業の占める割合が高くなってきています。

特に、第二次産業においては、昭和五十五年36・1％、昭和六十年40・3％、平成二年には43・7％と著しい増加を続けています。

秋田県全体と比較しても、平成二年の第二次産業の占める割合は11・9ポイント高く、全体の第二次産業就業人口の15％を占めています。



本荘由利地域の産業別純生産額は、平成元年で三千十六億二千万円で、秋田県全体の11・5％を占め、昭和六十年と比較して、五百五十七億六千万円、22・6％の増となっています。

産業別の割合を見ると、第一次産業が6・8％、第二次産業が51・8％、第三次産業が41・4％となっており、県内で唯一第二次産業の割合が五割を超えている地域となっています。

昭和六十年と比較して見ると、第一次産業が2・2％減、第二次産業が3・6％増、第三次産業が1・4％減となっており、第一次産業と第三次産業の割合が減少する中にあって、第二次産業は増加の傾向にあります。

第二次産業の中においても、特に製造業が著しく、純生産額全体の41％と他地域のほぼ二倍の割合を占め、昭和六十年との比較では3・6％の増となっており、本荘由利の地域経済における製造業のウエイトは、非常に大きいものとなってきています。

本荘由利地域における工業

本荘由利地域の工業は、電子機械等を中心とした製造業の集積度が高く、秋田県唯一のハイテクエリアを形成しています。

平成二年度で見ると、事業所数が四百五十所、従業者数が二万人工業集荷額が三千四百億円となっており、秋田県全体に占める割合は、事業所が11・6％、従業者が17・4％、工業出荷額が23・3％となっています。

中でも、工業出荷額は金額、割合とも秋田周辺とともに他地域を大きく上廻っており、本荘由利地域は、秋田県工業における索引地域となっています。

業種別の構成割合を見ると、事業所数、従業者数、工業出荷額とも電気機械が最も高く、特に工業出荷額では72・9％となっており地域全体の約四分の三を占めています。

本荘の朝市・夜市

一篭の　濃き紫や　桔梗売
朝市や　鯛にかぶさる笹の露

これはいずれも正岡子規が本荘を訪れた際に残した句である。茶色の篭に濃い紫の桔梗、鯛の赤に緑色の笹の葉、市場を彩る色合いはもちろん、雑踏のざわめきまで聞こえてくるようで写実派子規の面目躍如たるものがある。

ところで、本荘の市場の歴史は古い。霊元天皇の時代からと伝えられているから、慶長年代に城下町が形成されると同時に市が立ったものと思われる。

明治二十四年、町中央部の大半を焼失する大火のあと、大町、中町の人々が、両側を六尺ずつ提供し、市場に開放したことでそのにぎわいは益々盛んとなったのであるが、車社会の到来とともに現在の姿となっていることは実に残念なことである。

大町、中町に倣い明治三十七年中横町にも市場が新設されたがにぎわず、これは間もなく廃止になったという。

一方、夜市は桶屋町通りから由利橋まで、毎年六月一日から九月三十日まで開設された。

このころは、夕涼みや由利橋での観月を目当てに、相当数の人々が外出したものらしい。娯楽の少なかった時代の町が逆に活気があったのだから不思議なものである。夜市では主に、果物、切花類、蔬菜が商われ、朝市同様の活況を呈したという。

尚、現在でも中町市民市場や駅前市場では、本荘由利地方の季節ごとの新鮮な海の幸、山の幸などが所狭しと並べられ、早朝から多くの人々で賑わっている。

（63・5・10　市政だより　ふるさと探訪より）

昭和30年代の大町朝市

北内越の沿革

内越郷は応仁元年（一四六七）以後由利十二頭の一人、打越左近光隆の治下に属したが、慶長七年由利郡は最上義光に与えられ、打越氏は常陸新宮に移封される。翌年最上義光は、重臣楯岡豊前守満茂を遣わし、はじめ赤尾津（亀田）に居住し、後、慶長十五年には子吉郷に築城し移り住んだ。その後、元和八年（一六二二）に最上義光の孫・義俊の家臣に争論起こりは、最上義光の裁定を仰ぐことになり、とうとう山形幕府の裁定を仰ぐことになり、とうとう山形城六〇万石から近江一万石から本荘二万石へとそれぞれ封ぜられた。その結果、六郷領に、岩城四郎次郎が信州川中島から亀田二万石へとそれぞれ封ぜられた。その結果、横山・福田・川口の四か村は、両か村は六郷領に、柴野・畑谷・平岡・山田・中ノ目・漆畑・赤田・女岡・中館・牛寺の一〇か村は岩城領にと分割されることとなったのである。こうして、至る二四五年間は両氏によって治められたのである。

やがて幕藩体制の崩壊を迎え、その終焉でもある戊辰戦争は、この地にも及んだのである。明治元年（一八六八）四月、本荘・亀田両藩は、ともに官軍に属し、三崎口において庄内藩と戦った。庄内藩の抵抗は激しく、同年八月官軍側不利のまま、本荘藩主従は秋田を目ざし後退するのであったが、亀田藩は庄内側に降ってしまったのである。しかし、九月になってようやく戦況は好転し、終に戦火は止み官軍側の勝利となる。明治二年六月、六郷・岩城両氏は封土を奉還し藩知事となる。そして明治四年には廃藩置県をなし、両県とも秋田県管轄となる。明治十年に牛寺・赤田の両村を合併して赤田村となり、又、中の目・漆畑・平岡の三村が合併して新に内越村と改称した。その後明治二十二年の町村実施にあたり、内越・内黒瀬・深沢・中舘・赤田の五部落を合せて北内越村となり、昭和二十九年三月三十一日町村合併促進法により、旧本荘町を中心とする近郊六村と合併し本荘市となる。

〈本荘市編集発行の南内越・北内越の民俗より〉

赤田長谷寺大仏殿と祭典

本荘の話しことば ④ 夏

な　つ

「にっちゃん　しえみ採りにえごー」
「うん。あみコ持てや」
「穴じえみどごも探そでエ」
「その欅の木の下の　ちっちえ穴コどごほっけしてみった」
「ワアー。ボガッとおっき穴なった。アッ！指の先さモジョモジョでぐ触ってる」
「静がにそっと上さ上げてみった」
「アラッ！穴じえみ出て来た。掌ごじエー」
「家さ持ってて　すだれさ掴まらしえろでエ。脱皮するじき　きれえだもんな」

本荘市五軒町　佐藤勵子（主婦）　発行「本荘の話しことば」より転載

お知らせ・お願い

第四回「本荘ふるさと会」総会のご案内

第四回本荘ふるさと会総会・懇親会が次のとおり開催されます。

ご家族、ご友人をお誘い合わせのうえ是非多数ご出席くださいますようご案内いたします。

日　時　11月29日(日)
※本荘市物産展示即売会
午前11時～午後3時半
※受付
午前11時～
※総会・懇親会
正午～

会　場　『ホテル高輪』
港区高輪二ノ一ノ一七
港区泉岳寺隣り

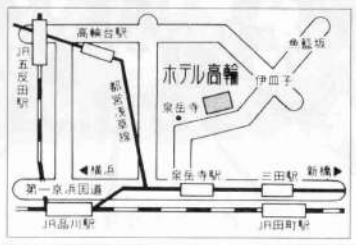
☎03（5488）1000

会　費　九、〇〇〇円

尚、懇親会では五月に渋谷のNHKホールで行われた「日本民謡フェスティバル'92」で〝本荘追分〟を唄い見事グランプリに輝いた後藤麻貴子さん（秋田市）をはじめ、秋田民謡梅若会の皆さんによる秋田の民謡や踊り、そして毎年大好評のふるさと本荘の特産品が当る抽せんプレゼントのアトラクションを予定いたしております。

会場案内図

● 羽田空港より車で20分。
● JR品川駅・田町駅より車で5分。
● 都営地下鉄（浅草線）泉岳寺駅下車、A2出口より徒歩2分。
五反田・品川方面からは最後部、新橋・三田方面からは最前部の車輌にご乗車くださいますと便利です。



新会員の紹介

この度、一八名の方が新会員となり、九月末現在で八五七名の会員数となりました。紙面の都合でお名前を掲載出来ませんので詳しくは別紙名簿をご覧ください。

又、会員の皆さんで、氏名・住所等に誤り、変更がございましたら事務局までご連絡ください。

◇　◇

本荘市制施行四〇周年記念
協力事業状況

平成六年に市制四〇周年を迎える〝ふるさと本荘〟の更なる発展と本会との絆を一層深めるため、会員の皆様より、4月から募金活動のご協力をいただいておりますが、9月末現在で一〇六名の皆様より九三五、三〇〇円のご寄付をいただいております。

尚、この募金は来年の9月30日まで二百万円を目標に行いますが、11月29日に「ホテル高輪」で開催される第四回総会でも受付けいたしますので、会員皆様のご協力をよろしくお願いします。

◇　◇

お待ちしております
原稿募集中!!

会員の皆さんから親しまれる、会報づくりを目指しております。

ご気軽にグループの紹介や近況雑感あるいはふるさと本荘の思い出等どんどんご寄稿ください。

お問い合せ
本荘市産業経済部地域振興課内
本荘ふるさと会事務局
☎0184（24）4181

編集後記

第五号の内容は幾分カタイものとなりましたが、ふるさと本荘の課題や現状をテーマにしてみました。

第一号から編集に盡力されてきた大井俊介氏（中竪町出身）が福島県郡山市に転勤になり辞任されました。

長い間ご苦労さまでした。